



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	他者の存在と文化的自己観が認知的不協和に及ぼす影響(fulltext)
Author(s)	齋藤,将大; 上淵,寿
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 64(1): 253-258
Issue Date	2013-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/132611
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

他者の存在と文化的自己観が認知的不協和に及ぼす影響

斎藤 将大*・上淵 寿**

教育心理学講座

(2012年9月10日受理)

1. 背景と目的

従来、人間の心理には基本的に普遍性が存在すると考えられてきた。つまり、あらゆる人間の心理は基本的に同じ法則によって成り立っているということである。もし差があるとすれば、それは発達による違いとみなされていた。

しかし、「日本人らしさ」「アメリカ人らしさ」といったように、個人が所属している文化や集団によって心理的メカニズムが異なることは想像に難くない。そのような背景から、それぞれの文化はそれぞれの価値を有していると考えられ、文化相対主義の考え方が心理に関しても重視されるようになった。文化的自己観も、このような文化による違いを背景に考えられている。文化的自己観とは、「ある文化において、歴史的に共有されている自己についての前提」である(北山, 1994)。

北山(1994)は、西欧では個人の能力や性格が自己認知において重視される「相互独立的自己観」が優位であり、東洋では他者や周囲の状況に溶け込むことが自己認知において重視される「相互協調的自己観」が優位であると述べている。

文化的自己観は、人が感情や認知、評価、推論などさまざまな心的活動を行う際に、異なった心理過程を導くとされ、様々な領域との関連が研究されてきた。文化的自己観と心理領域との関連に関する研究の1つとして、認知的不協和との関連が行なわれている。西欧文化で優勢な相互独立的自己観においては、他者の存在が顕在化されず、パーソナリティに関する否定

的フィードバックによって個人の意思決定能力が問題になる状況下で、認知的不協和による態度変化が生じるとされている。

これに対し、東洋文化で優勢な相互協調的自己観においては、他者の存在が顕在化され、他者からの評価が想定される状況下で、態度変化が生じるとされている(Heine & Lehman, 1997; Kitayama et al, 2004)。

しかし、竹村・有本(2008)が相互独立的自己観の高い実験参加者に対して行った自由選択パラダイムにおける実験では、実験中の同一グループ内に友人がいた場合、他者の存在が顕在化されていない条件であるにも関わらず態度変化がみられなかった。これは、認知的不協和場面における他者との関係が、態度変化に潜在的に影響を与えた可能性を示唆している。

しかし、認知的不協和場面における周囲の人間との関係性と文化的自己観の影響に着目した研究はあまり行われていない。また、周囲の他者との関係性が重視される相互協調的自己観の高い者にとって、認知的不協和場面における他者との関係性の違いが態度変化に影響を与えることが予測される。そこで、本研究では竹村・有本の研究で課題となっていた認知的不協和場面における他者との関係が、文化的自己観や態度変化に与える影響について検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 実験参加者

埼玉県付近の大学生48名(男性32名, 女性16名)を募集した。また、参加者募集の際に、出身校・年

* 東京学芸大学大学院 教育学研究科 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

年齢・所属していた部活動を尋ね、知り合い2人組で行う知人群と面識のない2人組で実験を行う他人群に振り分けた。

2. 2 実験期間

2011年12月5日(月)～2012年1月10日(火)

2. 3 実験材料

フェイスシート、文化的自己観尺度、CD評定尺度、衝立(相手の回答が見えないようにするために使用)、ペン、CD10枚、CDのサビ部分データ、ノートパソコン(Panasonic製 CF-W7)

2. 4 実験材料の詳細

文化的自己観尺度(20項目)

高田・大本・清家(2000)の「相互独立の一相互協調的自己観尺度」を使用した。それぞれの項目について、7件法(全くあてはまらない=1、あてはまらない=2、あまりあてはまらない=3、どちらともいえない=4、ややあてはまる=5、あてはまる=6、とてもあてはまる=7)で尋ねた。

CD評定尺度

有本・竹村(2008)を参考に、自由選択パラダイム用の質問紙を作成した。実験中に提示されたCDに対し、欲しいと思う順位とそれぞれのCDに対する魅力度を尋ねるものである。魅力度に関しては、左端に「0=全く欲しくない」、右端に「100=とても欲しい」と書きこまれた100mmの線分を用意し、参加者は線分に矢印を記入することで魅力度を評定した。

CD

自由選択パラダイムに用いるため、CDを10枚使用した。実験の手続き上サビ部分のみを聴かせるため、参加者の事前知識によっては曲のイメージを理解できない恐れがある。また、好みのアーティストの曲は全体的に魅力度が高くなり、CD間に差が出なくなることも考えられる。そのため、2006年～2010年の年間オリコンランキングのヒット曲からアーティストの重複がないように曲を選択することで、参加者がサビ部分を聴いただけで曲を理解し、魅力度に差が出やすくなるようにした。

CDのサビ部分データ

参加者の魅力評価の材料とするため、エンコードソフトを用いて、10～15秒のサビ部分のみを抽出した。

2. 5 実験計画

2回のCD評定による順位と魅力の変動をそれぞれ

従属変数とし、参加者群(知人・他人)×文化的自己観(高・低)の2要因参加者間計画である。

2. 6 手続き

参加者は募集の際に、音楽の好みと自己観に関する研究であり、2人1組で行うという説明を受けて実験に参加した。

実験当日は、参加者は所定の席に座り、実験者から実験の説明を受けた。また、参加者の席は、お互いが向かい合うように設置した。実験者は参加者らに対し、目の前に座っている人と知り合いかどうかを尋ね、参加者群の振り分け操作が正しく行なわれたかを確認した。参加者は、実験者の指示に従ってフェイスシートと文化的自己観尺度に記入を行った。その後、実験者は通し番号の振られた10枚のCDを参加者らの前に提示し、「この10枚のCDを比較して、あなたが欲しいと思う順番とそれぞれのCDを欲しいと思う魅力度を記入してください」と教示した。実験参加者は、各CDのサビ部分を10秒～15秒程聴いた後に、CDの順位と魅力度を評定した。順位と魅力度の記入後、実験者は質問紙を回収し、「実験の最後に、最初に行った自己観に関する話し合いをして頂きます。」と教示した。これは、実験相手の存在を顕在化させて他者からの評価を予期させる目的の教示であったため、実際の話し合いは実験の最後には行わなかった。

また、参加者が順位付けしたCDのうち、5位と6位のCDを確認した。そして、参加者が5位と6位に選択したCDを提示し、もう一方の参加者に見えないように欲しいと思うCDを選択させた。この操作は両方の参加者に対して行なった。回収した質問紙を返却し、「曲を聞かない状態でのCDの好みについて調査する」と教示し、再度CDの順位と魅力を評定させた。

評定後に質問紙を回収し、本実験が音楽の好みと自己観の研究ではないことなどのデブリーフィングを行い、実験を終了した。

3. 結果

3. 1 文化的自己観

文化的自己観尺度の、相互協調的自己観・相互独立的自己観の2尺度、全20項目の質問についてそれぞれの項目について、7件法で回答を求めた。この回答を、「全くあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「あまりあてはまらない」を3点、「どちらともいえない」を4点、「ややあてはまる」を5点、

表1 尺度得点の記述統計

	N	最小値	最大値	M	SD	α
相互独立的自己観	48	22	52	36.08	7.10	.796
個の認識・主張	48	8	25	15.27	3.84	.776
独断性	48	13	31	20.81	4.37	.688
相互協調的自己観	48	20	54	38.19	8.27	.880
他者の親和・順応	48	12	35	22.92	5.72	.759
評価懸念	48	7	22	15.27	3.55	.876

表2 相互協調的自己観における順位得点と魅力得点の平均値と(標準偏差)

	知人群 N = 24		他人群 N = 24	
	高群 N = 16	低群 N = 8	高群 N = 9	低群 N = 15
順位得点	1.44 (1.15)	0.88 (0.84)	1.00 (0.87)	1.07 (0.70)
魅力得点	3.25 (8.00)	5.00 (6.57)	11.67 (3.32)	12.20 (7.74)

「あてはまる」を6点, 「とてもあてはまる」を7点として得点化した。

また, 相互独立的自己観は「個の認識・主張」「独断性」の2つの下位尺度, 相互協調的自己観は「他者への親和・順応」「評価懸念」の2つの下位尺度によって構成されている。2つの自己観尺度及び各2つの下位尺度ごとの平均値と標準偏差は, 表1に示す。

表1に示した平均値, 標準偏差をもとに, 各尺度の得点が平均値未満の参加者を低群, 平均値以上の参加者を高群とする。

3. 2 CD順位, CD魅力の得点化

有本・竹村(2008)を参考に, 初回評定時に5位と6位に評定したCDの中から選択されたCDの「順位」の上昇値と選択されなかったCDの順位の下降値の合計を, CD順位の得点とする。

また, 初回評定時に5位と6位に評定したCDの中から選択されたCDの「魅力」の上昇値と選択されなかったCDの魅力の下降値の合計を, CD魅力の得点とする。

これらの得点は, 参加者の実験中の認知的不協和の程度を示す。

3. 3 相互協調的自己観が認知的不協和に与える影響

選択したCDの順位得点, 魅力得点をそれぞれ従属変数とし, 参加者群(知人・他人)と相互協調的自己

観(高・低)を独立変数とした2要因分散分析を行った。順位得点, 魅力得点の記述統計を表2に示す。分析の結果, 魅力得点を従属変数とした際に, 参加者群間に主効果が見られ($F(1, 44) = 13.42, p < .001$), 他人群が知人群よりも高かった。

また, 相互協調的自己観の下位尺度である「他者への親和・順応」「評価懸念」についても同様に2要因分散分析を行った。

他者への親和・順応において順位得点を従属変数とした際に, 参加者群×他者の親和・順応において交互作用がみられた($F(1, 44) = 4.71, p < .05$)。単純主効果の結果, 知人群において, 他者の親和・順応の低群に比べ, 高群に順位得点の変化がみられた。また, 魅力得点を従属変数とした際に, 参加者群間に主効果がみられ($F(1, 44) = 14.45, p < .001$), 他人群が知人群よりも高かった。

評価懸念においては, 魅力得点を従属変数とした際に, 参加者群間に主効果がみられ($F(1, 44) = 16.49, p < .001$), 他人群が知人群よりも高かった。

3. 4 相互独立的自己観が認知的不協和に与える影響

順位得点, 魅力得点をそれぞれ従属変数とし, 参加者群(知人・他人)と相互独立的自己観(高・低)を独立変数とした2要因分散分析を行った。順位得点, 魅力得点の記述統計を表3に示す。分析の結果, 魅力得点を従属変数とした際に, 参加者群間に主効果がみ

表3 相互独立的自己観における順位得点と魅力得点の平均値と (標準偏差)

	知人群 N = 24		他人群 N = 24	
	高群 N = 16	低群 N = 8	高群 N = 9	低群 N = 15
順位得点	1.56 (1.09)	0.63 (0.74)	0.86 (0.90)	1.12 (0.70)
魅力得点	4.19 (8.46)	3.13 (5.33)	12.14 (3.67)	11.94 (7.28)

られ ($F(1, 44) = 16.11, p < .001$), 他人群が知人群よりも高かった。

また, 相互独立的自己観の下位尺度である「個の認識・主張」「独断性」に関しても同様に2要因分散分析を行った。

個の認識・主張においては, 分析の結果, 魅力得点を従属変数とした際に, 参加者群間に主効果がみられ ($F(1, 44) = 14.90, p < .001$), 他人群が知人群よりも高かった。

独断性においては分析の結果, 魅力得点を従属変数とした際に, 参加者群間に主効果がみられ ($F(1, 44) = 17.07, p < .001$), 他人群が知人群よりも高かった。

4 考察

4.1 文化的自己観と認知的不協和

相互協調的自己観・相互独立的自己観のどちらにおいても魅力得点に有意差がみられ, 他人群において知人群よりも認知的不協和による態度変化が起きていた。また, どちらの文化的自己観の下位尺度においても, 同様に他人群において態度変化がみられた。

相互協調的自己観においては, 自分が他者からどう見られ評価されるかが重要である。従って, 相互協調的自己観において, 認知的不協和の自由選択パラダイムでは, 他者の存在が顕在化された場合に態度変化が生じるとされている (Kitayama et al, 2004)。しかし, 本研究では他人群のみで態度変化が示された。知人の場合, 日頃のやりとりや相互作用から, 自分が他者からどのように見られるかを想像することが出来ると考えられる。よって, 本研究で他者の存在が顕在化された場合においても, 態度変化が生じなかったと考えられる。

一方で, 相互独立的自己観においては, パーソナリティに関する否定的フィードバックによって自身の意思決定能力が揺らぐ場合に認知的不協和の態度変化が

生じることが先行研究で示されている (Heine & Lehman, 1997)。本実験では否定的フィードバックを行わず, 自身の自己観についての話し合いを予告することによる他者の存在の顕在化のみを行った。否定的フィードバックが行われず, 文化的自己観に関する話し合いは実際には行われていないため, 自身の意思決定能力は揺らぐが, 認知的不協和は発生しないはずである。従って, 知人群と他人群の両方において態度変化は生じないと予測されていた。しかし, 本研究では他人群において態度変化が生じた。このことから, 他人群においては友人群と比べて, 他者の存在の顕在化が自身の意思決定能力に影響を及ぼしたと考えられる。

4.2 今後の課題と展望

本研究の結果から, 認知的不協和場面における他者との関係性が, 態度変化に影響を及ぼしている可能性が示唆された。しかし, 他者との関係性がどのようなプロセスによって態度変化に影響を与えたかについて明らかになったとは言い難い。また, 先行研究では他者との関係性に着目した研究が十分に行われていない。よって, 今後は実験手続きの見直しとともに, 他者との関係性に着目した研究を蓄積していくことが重要である。

5 引用文献

- Heine, S. J., & Lehman, D. R. (1997). Culture, dissonance, and self-affirmation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 389-400.
- 一言英文・松見淳子 (2004). 文化と文化的自己観 人文研究, 54, 55-70.
- 池上知子・遠藤由美 (1998). グラフィック社会心理学 サイエンス社.
- 北山忍 (1994). 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.

北山忍 (1998). 自己と感情: 文化心理学による問いかけ 共立出版.

北山忍 (2003). 「自己」への文化心理学的アプローチ 山口勸 (編) 社会心理学—アジアからのアプローチ— 東京大学出版会 pp.41-49.

Kitayama, S., Snibble, A.C., Markus, H. R., & Suzuki, T. (2004). Is there any “free” choice? Self and dissonance in two cultures. *Psychological Science*, 15, 527-533.

高田利武・中村美智子・濱野千恵美・山邊瑞枝 (2000). 相互協調的自己観と内集団バイアス—最小条件集団パラダイムにおける状況要因と個人要因の効果— 奈良大学紀要, 29, 117-128.

竹村幸祐・有本裕美 (2008). 「北の大地」における相互独立的自己: 北海道での認知的不協和 実験社会心理学研究, 48, 40-49.

他者の存在と文化的自己観が認知的不協和に及ぼす影響

Effects of presence of others and cultural self-viewing on cognitive dissonance

齋藤 将大*・上淵 寿**

Masahiro SAITO and Hisashi UEBUCHI

教育心理学講座

Abstract

The purpose of this study is to presence of friends or unknown other and interdependence or inter on cognitive resonance. 48 undergraduate students participated the experiment. The experiment's procedure was to follow free-selection paradigm (Arimoto & Takemura, 2008). Results were to regardless of cultural self-, changes of selection order and attraction were influenced by presence of unknown others. Finally, unsolved problems were discussed.

Key words: cultural self, presence of others, cognitive dissonance

Department of Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、1) 相互協調的自己観と相互独立的自己観が、意思決定時に生じた認知的不協和を解消するにあたり、知人あるいは未知の他者の存在が、どう影響するかを検討することである。大学生48名が実験に参加し、実験手続きは自由選択パラダイム(有本・竹村, 2008)に従った。分析の結果、文化的自己観の違いに関わらず、ターゲット商品の選択順位や魅力度の変化に、未知の他者の存在が影響することが示された。ゆえに、他者の存在の顕在化が自身の意思決定能力に影響を及ぼすと考えられる。最後に、残された問題について考察した。

キーワード: 文化的自己観, 未知の他者, 認知的不協和

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)